

訳者解説

本書は、葛兆光 (Ge Zhaoguang) 『宅兹中国 重建有关「中国」的历史论述』(北京・中華書局、二〇一一年)の全訳である。この中国語タイトルを直訳すると、『この中国に住む「中国」についての歴史論述の再構築』となる。本書はこれを『中国は、中国なのか——「宅兹中国」のイメージと現実』とした。この間の経緯を含め、原著『宅兹中国』とその日本語訳である本書の理解のために以下に若干の解説をおこなっておきたい。

一、葛兆光氏の中國思想史研究

葛兆光氏は一九五〇年上海市生まれ。北京大学大学院中国古典文献学専攻を修了後、清華大学歴史系教授、復旦大学文史研究院院長などを歴任。現在、復旦大学歴史系特聘資深教授。現代中国を代表するもつとも著名な思想史、歴史研究者の一人である。また、ハーバード大学、プリンストン大学、ルーバン大学、東京大学、京都大学、関西大学などでの滞在研究経験を持ち、世界的な活躍もめざましい。

日本でも、岩波書店から翻訳出版され、第二六回アジア・太平洋賞大賞を受賞した『中国再考 その領域・民族・文化』(二〇一四年)をはじめ、岩波書店の雑誌『思想』や『世界』に発表されてきた、「中国」を独自の視点からと

ええなおす論考が学術界に大きな刺激をあたえてきた。これらの業績から葛氏には、近年提唱されている、地域横断的な視点、相互連関的な視点から世界の歴史を再構築するいわゆるグローバルヒストリーの系統にある学者との印象があるかもしれないが、氏の本領は別にある。

葛氏の初期の代表的著作に、『道教与中国文化』（上海・上海人民出版社、一九八七年）がある。この書は、一九九三年に本書と同じ東方書店から『道教与中国文化』として日本語訳版が出版され、道教研究者を中心に高い評価を得た。ただしそれは、監訳者・坂出祥伸氏の解説に「パースペクティブ的な角度から、道教与中国文化全体との相互の影響関係を論じて」いる、とあるように、道教という一領域に終始する研究ではない。膨大な関連資料の分析を通して道教文化を論じつつ葛氏がおこなっているのは、そのような宗教的現象を生みだした人間の思考を明るみに出すことであった。

早くからこのような視点のもとに進められてきた葛氏の研究は、『中国思想史』（上海・復旦大学出版社、上巻・一九九八年、下巻・二〇〇〇年）に集大成される。数千年におよぶ中国の思想の歴史を一人の研究者が書きあげることじたいが偉業であるが、この書の価値は、加えてそれがほかに類を見ない思想史になっていることにある。

葛氏の思想史は各時代の傑出した思想家が前面に出てくることがない。この書で論述されるのは、知的エリートにのみあらわれた思想の歴史ではなく、中国に展開されたあらゆる位相の思考とその影響関係、そしてそれら思考の総体の史的展開なのである。このような思想史叙述を実現するために、葛氏は、思想史が考察の対象とする資料の範囲を広げることを提唱し、実際に、考古学的発見、碑文、文字、図像、地図、文学作品、図書目録、類書、啓蒙的教科書、さらには『道教与中国文化』でも試みられた宗教現象や信仰形態など、人間の思考の痕跡がうかがえるあらゆる資料を分析の対象として拡張し、中国に展開された人間の思考の歴史を叙述することに成功したのである。邦訳がないのは残念であるが、これほど刺激に富む中国思想史の著作は多くはない。上下二巻、千数百ページにもおよぶ葛氏

の『中国思想史』は、中国に展開した人間の思考の史的展開を叙述するいわゆる観念の歴史 (history of ideas)、知性の歴史 (intellectual history) として、まさに金字塔である。

しかし、葛氏の歩みはここでとどまることはない。これほどの思想史を書きあげたあとでなお、葛氏は、目のまえの現実世界の複雑さ、未来と歴史の不確定性にたじろぎ、「世界を安易に理解した気になってはいけない」と自戒する(『中国思想史』「後記」)。その自戒は思想史を書くことでもたらされた新たな問いから生じていた。そもそも「中国思想史」を可能とするものは何であるのか。すなわち、その「中国」とは何か、何が「中国」なのか、という問いであった。

長年にわたる『中国思想史』執筆に疲労を感じながらも、その疲労をものともせず「中国」という世界の複雑性に向きあい、その複雑性を描きつくそうとする。そうして書き進められたのが『宅茲中国』であった。

二、原著『宅茲中国』について

対象とする資料の範囲を拡大して全体像を描きだそうとした『中国思想史』につづいて、原著が採用するのは「周辺から中国を見る」という方法である。

葛氏が所属する復旦大学の文史研究院において、二〇〇七年にまさにこの「周辺から中国を見る」という研究プロジェクトが立ちあげられ、これまでに多くの成果が出されてきた。このプロジェクトについては、開始から五年後の二〇一二年に葛氏によって日本でも報告されており、そこには中国で刊行されてまもない原著の反響についても言及があり、参考になる(鈴木達明氏による日本語訳「周辺から中国を見る」が『東方学』第二二四輯に掲載されている)。

周辺とは中国の四方である。『中国思想史』で試みられた資料の拡大はここではさらに地域的にも拡張されたので

ある。西域、モンゴル、チベット、新疆、満洲、朝鮮、日本。四方の非漢民族がとらえる中国。これらを多面鏡が映しだす中国と見て、一つひとつに丁寧に分分析を加えていく。原著の魅力はここにある。そしてその最大の特徴は、周辺のなかでも中国の東方、すなわち日本における東洋学、アジア史学の成果、近代的アジア認識、現代のグローバルヒストリーの視点をもった東アジア研究、これらの分析に多くのページをさき、日本が描きだす中国を歴史のなかに確かに出現した中国として、中国がとらえた中国と同列に論じていることである。あわせてその論述が、日本が自国のうしろすがたを見るための合わせ鏡となる可能性を示唆する点も興味深い。

原著には欧米の新しい歴史研究の方法論も多く登場する。ただしそれは援用を目的としたのではない。葛氏は原著であらゆる歴史論述の可能性を探ろうとしており、そのために参照した各種理論に検討を加えているのである。これと関連して、そのさらなる特徴をあげるなら、注釈が膨大な量にのぼることである。それが自説の根拠を完備させるためであるのはもちろんであるが、葛氏の場合、自説と齟齬する資料や自説への反論までも併載する。ひとえにこれは、「中国」とは何か、何が「中国」かをめぐる歴史論述の再構築が、理論に頼るのではなく、あくまで歴史のなかでおこなわれなければならないとする葛氏の、資料を一つとしてゆるがせにしない誠実さのあらわれにほかならない。

三、『中国再考』と本書の関係について

辻康吾氏の監修によって「岩波現代文庫オリジナル版」として出版された『中国再考』（永田小絵訳）は、『宅茲中国』の副産物と言えるものである。『中国再考』出版の経緯については、辻氏の「解説」に説明がある。それによると、当初この『宅茲中国』を翻訳する計画があったが、「専門書である同書の出版は難航し」、あらためて葛氏から論

集のかたちで書きおろされたものを翻訳することになったという。

『中国再考』は、著者・葛氏の「あとがき」にも記されているように、『宅茲中国』執筆の過程、あるいは出版後におこなわれた葛氏の講演やインタビュー記事がもとになっている。言わば一般向けに編成されたものである。その内容もタイトルに『中国再考』とあるように、「中国」そのものに焦点があてられている。これに対し、『宅茲中国』は根拠を注に示しながら論じられる専門書であるのもちろんだが、そのサブタイトル「重建有關「中国」的歷史論述〔中国〕についての歴史論述の再構築」が示すように、よりスケールの大きな目標へ向かったものとなっている。そしてなにより『中国再考』との大きな違いは、前節で述べた原著の特徴である日本の東洋学、アジア史学の成果への分析が重要な核となっていることである。それは、葛氏が『世界』（二〇一六年八号、岩波書店）でのインタビューに答えて、「日本の学術界に対する考察などは、日本語版『中国再考』のテーマから少し逸れるので、あえて収録しなかった」と言うとおりである。

『中国再考』の監修者である辻氏はその後も、葛氏の論考を積極的に日本に紹介している。一つは「中華民族」の由来——二十世紀上半期の中国知識界の曲折——（『思想』二〇一六年六号、岩波書店）、一つは「何が中国か？」の思想史——論じられた三つの時代——（『思想』二〇一八年六号、岩波書店）である。いずれも辻氏の翻訳である。前者は、『中国再考』が日本に遅れて香港で、『何為「中国」？ 疆域、民族、文化与歴史（何が「中国」か？ 領域・民族・文化と歴史）』（香港・牛津大学出版社、二〇一四年）として出版された際に増補された一章を日本語に訳したものである。日本語版『中国再考』は全五章であるが、香港版は全六章となっており、この一文が第三章としてくみいれられている。後者は、葛氏が、『宅茲中国』、『何為「中国」？』につづき、一連の考察を締めくくる三部作の最後として二〇一七年に『歴史中国の内与外（歴史上の中国の内と外）』（香港・香港中文大学出版社）を出版し、それを受けておこなわれた中国・雲南での講演の日本語訳である。いずれも本書の理解の助けとなるものである。

四、「宅茲中国」という四文字について——「中国」が意味するもの

つづいて、原著のタイトルであり、本書日本語訳版でもサブタイトルにそのまま用いた「宅茲中国」の四字について説明したい。

一九六三年、中国陝西省宝鸡県賈村から西周時代初期（紀元前一二世紀頃）の青銅でつくられた酒器が出土した。酒器といっても祭祀用なので、高さ三八センチメートル、口径二八・八センチメートル、重さ一四・六キログラムと大型である。この酒器は「何」という人物にゆかりのあるものであったことから「何尊」と呼ばれ、現在は宝鶏青銅器博物館に所蔵されている。その酒器の内底部に銘文があり（銘文の拓本は本書二ページ「図1」）、「宅茲中国」はその銘文中に見える一文であった。そしてこれが現在のところ、「中国」という表現が見られるもつとも古い例である。では、紀元前一一世紀に記された「中国」とはどのような意味であったのだろうか。

暴君・殷の紂王を倒し、周を建国した武王はほどなくして亡くなる。父のあとを継いだ成王（在位、前一〇四二—前一一〇二）はあらたに成周という都城を建設する。「何尊」の銘文は、この新都造営に際し、それが、先代・武王の遺志であったことを宣言する内容となっている。そのなかで、殷との戦いに勝ち、それを天に報告する武王の言葉として、つぎの文が刻まれている。

余其宅茲中国、自之乂民。

余は其れ、茲、中国に宅し、之自り民を乂めん。

「わたしはここ中国に居を構えて、この地から民を治めよう」。ここに出てくる「中国」とは、「中央の地というぐ



「何尊」

(杜迺松『古代青銅器』文物出版社、2005年、口絵より)

らしいの意味で、成周周辺のごく狭い範囲を指している」(佐藤信弥『周——理想化された古代王朝』、中公新書、二〇一六年、四五頁)とされる。成周とは今の河南省洛陽付近である。ではなぜ、洛陽が「中央の地」であったのだろうか。

武王に滅ばされた殷の都・商邑しやういは今の河南省安陽県付近であった。周の武王が都としていた鎬京こうけいは今の陝西省西安付近である。そして武王の遺志を継いで成王があらたに造営した都・成周は洛陽付近である。安陽、西安、洛陽、これら三地点を地図上で見ると、洛陽はちょうど安陽と西安との中間に位置する。また、この時代の「国」の字は「地域」といった意味であった(国の旧字「國」のくにがまえの内部は、「域」の「或」の字である。なお、当時、今日言うところの「国」には「邦」の字を用いた)。つまり、紀元前一一世紀頃の「中国」という言葉は、「二地点の中間の地域」といった意味で使われていたと考えられるのである。洛陽が「中央の地」であったのは、厳密には東西拠点(東の商邑と西の鎬京)の中間の地

であるということであった。

「何尊」に「中国」と刻まれてから一〇〇〇年の時をへだてて周の歴史をつづった『史記』は、この新都造営についての記述で、洛陽を「此れ天下の中」とする。この「中」は、つづいて「四方の入貢の道里均し」（周本紀）とあるように、中間地点ではなく、四方の中心の意味であるが、それでも「道里均し」とあるように、「距離的に均等な四方の中心」であった。周はいくつかの拠点をもつ複都制であったことから、紀元前一二世紀の「中国」という言葉に観念的な「天下の中心」がイメージされていたとは考えにくい。あくまで「即物的に語られる」（吉本道雅「中国古代における華夷思想の成立」、夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』所収、京都大学学術出版会、二〇〇七年、五頁）、「中央の地」であったのである。

このようにもとは単なる距離的、地理的な意味でしかなかった「中国」にはその後、さまざまなイメージが投影されることになる。中国は、早くも紀元前四世紀に、このような知的認定のアンチテーゼとして二地点間の中央地域を「混沌」とする思考（『莊子』応帝王篇）を生みだしはしたものの、「知的処理」の拡張がとどまることはなかった。「中国」という言葉は膨張をつづけ、ついには数千年のちの現代において葛氏が本書でおこなうような分析を待つまにになったのである。葛氏は、「宅茲中国」を書名としたのは「借りて象徴とただけ」（本書「はじめに」）とするが、まことに意義深いことであった。

五、本書の翻訳について——中国と「中国」の同一性

以上のような背景をもつ『宅茲中国』を、本書日本語訳版は『中国は、中国なのか』としたのであるが、日本語タイトルをどうするかについてはかなり頭を悩ました。『宅茲中国』そのままとしたのでは、日本の一般読者には意

味が通じない。それを書きくだして、「茲^{こゝ}中国に宅す」、「茲^{こゝ}の中国に宅す」といった案がまず浮かんだが、これもまた十分に熟した表現であるとは言えない。そこで、内容をくんだオリジナルのタイトルをつけることとした。とはいえ、これもけっして容易なことではなかった。歴史のなかの中国の複雑性を多面鏡に照らすように描きだした本書のいったいどこを切りとって表題とするか。結果、原案として考えだしたものは三〇とおりにものぼった。東方書店編集部とのたびかさなる検討をへて、本タイトルに決定した。

地理的な中国、そして観念的な「中国」、双方の成立要件となる構成要素。それら構成要素の相互主観的關係に常に影響されながら、それでも均衡を保とうとして中国は移動し、「中国」は変容しつづけた。その変動の多様な局面を、多面鏡が映しだす中国という比喩のもとに、周辺を含めた膨大な資料の分析とねばり強い思考によって明るみに出す。そうして浮かびあがる「中国」の複雑性に対し、そこに評価をさしはさむのではなく、それを歴史のなかの「中国」として複雑なままに受けとめる。このような原著を、中国と「中国」の同一性をめぐる論考ととらえたのである。

一方で、「宅茲中国」というこの四文字を書名に残したいとの思いもあった。というのは、評判を呼んだ原著は日本でもこれまでたびたび言及されており、そこでは『宅茲中国』という書名で紹介されているからである。そこでサブタイトルに「宅茲中国」を用いることにした。その際に懸念されたのは、「茲」が常用漢字ではないことである。常用漢字でない漢字が書名に含まれるものはあるか。書棚を眺めてみたが、固有名詞を除いてはまったく見あたらなかった。その時、遠い記憶のなから呼びさまされた一冊の書がある。『河殤^{かしよう}』である。「殤」は常用漢字ではない。『河殤』が話題になったのは一九八〇年代の終わりであった。個人的なことになるが、当時、外語大の学生として現代中国語を専攻していた訳者は、授業で話題になったこの本を図書館で見つけた時に、この見なれない漢字が強く印象に残ったのを覚えている。当時は「河殤熱」と呼ばれるほどの現象となったものの、その後はすっかり忘れさら

れた感のあるこの書を数十年後に思いだしたのは、ひとえにこの「殤」という漢字のためである。見なれない漢字がイメージを喚起することもあるのだと思いつつ、数十年ぶりに『河殤』（弘文堂、一九八九年）を手にとってみた。その翻訳者が辻康吾氏であることのほかに、そのあとがきに『河殤』の日本語訳をどうするかについて悩んだ末にそのままとしたとあること、さらにはその内容が中国が背負いつづける黄河文明という重荷に切りこんだものであることにあらためて気づき、不思議なつながりを感じて、「宅茲中国」を副題とすることに決めた。

『河殤』は八〇年代の終わり、苦境にあった中国に、中華帝国はとくに終焉を迎えているのだとの自覚をうながすために、黄河文明への葬送曲であるかのようにして制作されたテレビドキュメンタリーであった。それから三〇年。中国は「台頭」（葛氏によれば「膨張」）し、天下の中心たる帝国意識がまたしてもすがたをあらわしはじめた。しかし、人びとがイメージする帝国としての「中国」とはどの「中国」であるのか。広大な版図を誇るものの非漢民族に支配された元や清であるのか。狭い領土ではあるが漢民族王朝の明であるのか。弱小ではあるが中華民族同一性が形成された宋であるのか。それとも千数百年も昔の漢や唐であるのか。さらにさかのぼって黄河流域に地理的な「中央の地」として都が造営された周であるのか。

人びとがもつ中国と「中国」をめぐるイメージと現実とについて、あるいはその同一性について、本書は読む人各自の思考のなかで整理する手だてを懇切に教えてくれることであろう。日本語訳のタイトルは訳者としてこのような思いをこめたものである。

六、おわりに

原著の翻訳は当初の予定より大幅に遅れてしまった。すでに述べたように、葛氏は『宅茲中国』に始まる三部作を

完成させている。その完結編となった二〇一七年の『歴史中国の内与外』の「後記」においては、『宅茲中国』の日本語訳が出版予定であることに触れられているし、それを受けた「何が中国か？」の思想史」の辻康吾氏による「解題」においても同様の告知がある。話題となった原著の日本語訳が待たれていることはしばしば耳にすることになった。そのたびに胸の痛む思いであった。

遅れたことにはさまざまな要因があるが、ここでは翻訳上のことのみあげておきたい。原著には膨大な資料が引用されている。翻訳にあたっては、一部入手不可のものを除いてすべて原典の確認をおこなった。訳者として可能な限り著者の思考を追体験しようとしたためであるが、これに時間を要した。その過程で生じるハウリングを訳注として処理したいとの思いもあったが、煩瑣になるのを避け、訳者の注釈は独立させずに「」内にとどめるのみとした（ただし、著者の合意を得て、原文を改めたところがある）。

翻訳の過程では、時に、不明な箇所を葛兆光先生ご本人にメールにて尋ねることもあった。そのたびに、翻訳が遅れていることを詫びるのであるが、葛先生はいつもあたたかい言葉をかけてくださった。感謝の念にたえない（個人的なことで恐縮であるが、葛先生の最初の日本での出版となる『道教と中国文化』においてささやかながらお手つだいさせていただいており、その書にはわたしの名前が小さく記載されている。その時以来の縁であり、わたしには先生である）。

原著には韓国語訳と英語訳とが出ている。英語版は *Here in 'China' I Duell Reconstructing Historical Discourses of China for our Time* (BRILL, 2017) である。英語訳については、本翻訳にあたって随時参考した（なお、英語版には第四章、序論の「付記二」、第三章の「付録」がなく、ほかにも本文、注釈において未訳の箇所が散見される。韓国語版『이중국에 거하라 / 중국은 무엇인가 / 에 대한 새로운 탐구』(この中国に居せよ「中国は何者か」に対する新たな探求」(グラナリ、二〇一二年)は全訳である。部分的に独自の注釈も付されている)。

さて、大幅に遅れていた翻訳作業の最後の詰めが、このたびのパンデミックによつてさらなる遅れをとることにな

ってしまった。作業にあてる時間がつくれないもどかしさのなか、しかし、眼前に展開するのは、まさに本書で描かれた、危機に直面する際に、境界が「境界」となるさまであった。このような実感をともなうて本書を世に送りだすことができることを出版が遅れたことのせめてもの申し開きとしたい。それはともかく、現代社会がはじめて経験する危機と、それにより引き起こされる国際秩序の変化をまのあたりにして、まさに今、本書が広く読まれ、「中国」ひいては「境界」をめぐる議論が深まる契機となることを切に願っている。

なお、本書第二章と第三章については内容面からその翻訳を、中国イスラームを専門とする佐藤実氏にお願いした。氏にはわたしの担当箇所についても随時、意見を求め、有益な助言をもらった。最終的に橋本が全体を精査し、統一をはかっているのももちろんである。

最後に、東方書店の川崎道雄氏、家本奈都氏には、長期にわたるこの翻訳作業をしんぼう強く支えてくださり、またその過程ではさまざまなご助力をいただくこととなった。ここに深く感謝申しあげたい。

【主要著作】

葛兆光氏の著作は多数あるが、本書と関係するものを以下に掲げておく。

『中国思想史』全三卷（上海・復旦大学出版社、一九九八、二〇〇〇年）

既述のとおり、一五〇〇ページほどにのぼる大著であり、通常の思想史とは異なり、文字、図像、地図、文学作品、図書目録、類書などへ考察の対象を広げて、知的エリートにとどまらず中国に展開した知性の歴史の総体を論述したものである。また、思想史叙述の方法についても多くのページをさいて論じられている。

『西潮又東風 晚清民初思想、宗教与學術十講』（上海・上海古籍出版社、二〇〇六年）

『中国思想史』が一八九五年で終わっていることを受け、それにつづく時代である清末民初の学術界の動向を描いたものである。この書に対して、末本文美士氏が「思想と思想史——葛兆光氏の近業をめぐって」（『思想』二〇〇七年九号、岩波書店）として紹介、批評している。

『想像異域 読李朝鮮鮮漢文燕行文献札記』（北京・中華書局、二〇一四年）

『宅茲中国』でも考察の対象とされた李朝鮮鮮時代の清への使節が残した「燕行録」を集中的に分析したものである。

『且借紙遁 読書日記選一九九四―二〇一一年』（桂林・広西師範大学出版社、二〇一四年）

原著執筆時期にあたる読書日記からの抜粋であり、原著に参考されている書籍も多く登場する。原著の形成の一端をうかがえて興味深い。

『何為「中国」？ 疆域、民族、文化与歴史』（香港・牛津大学出版社、二〇一四年）

既述のとおり、日本での『中国再考』出版ののち、一章を追加して香港で出版された『中国再考』の中国語版である。

『歴史中国的内与外 有関「中国」与「周辺」概念的再澄清』（香港・香港中文大学出版社、二〇一七年）

既述のとおり、『宅茲中国』、『何為「中国」？』とともに一連のテーマをもつ三部作の完結編である。

『思想史研究課堂講録 視野・角度与方法』全三冊（北京・三聯書店、二〇一九年）

大学での講義録。思想史研究をおこなうための方法論や文献、考古文物、図像資料のあつかいかなどが平易に説かれている。原著の論述スタイルの基礎にあるものであり、参考になる。

また、葛氏の著作で、日本語で読めるもののうち本書と関係するものを以下に掲げておく。

『道教と中国文化』（坂出祥伸監訳、大形徹・戸崎哲彦・山本敏雄訳、東方書店、一九九三年）

『中国再考 その領域・民族・文化』（辻康吾監修、永田小絵訳、岩波書店、二〇一四年）

『『海潮音』の十年——一九二〇年代仏教新運動の内的論理と外的志向』（上）（下）（土屋昌明訳、『思想』二〇〇二年一・二号、一二号、岩波書店）

「誰の思想史か？ 誰のための思想史か？——日本における日本近代思想史研究とその示唆するもの」（池麗梅訳、『思想』二〇〇七年九号、岩波書店）

「周辺から中国を見る 復旦大学文史研究院の近五年間における関連研究の概括」（鈴木達明訳、『東方学』第一二四輯、東方学会、二〇一二年）

「グローバルヒストリーの潮流の中で各国史にまだ意義はあるのか」（羽田正編『グローバルヒストリーと東アジア史』所収、東京大学出版会、二〇一六年）

「『中華民族』の由来——二十世紀上半期の中国知識界の曲折——」（辻康吾訳、『思想』二〇一六年六号、岩波書店）

「インタビュー 現代国家と『天下』意識の軌み 中国をとりまくトラブルの根底と展望」（本田善彦、『世界』二〇一六年八号、岩波書店）

「『何が中国か？』の思想史——論じられた三つの時代——」（辻康吾訳、『思想』二〇一八年六号、岩波書店）

二〇二〇年七月

訳者 橋本昭典